

## 「植物園北遺跡」 現地説明会資料

1992年3月22日

所在地 京都市左京区下鴨半木町  
調査期間 1991年6月4日～継続中  
調査面積 約6,000㎡  
調査主体 (財)京都市埋蔵文化財研究所

### はじめに

ここで発掘調査をしている遺跡は「植物園北遺跡」です。この遺跡は1979年に公共下水道工事に伴う立会調査で発見・確認されたものです。その後の発掘調査などによって、古墳時代初めの竪穴住居址を中心として、縄文時代から中世に至るまでの遺構が重なる複合遺跡であることがわかりました。今回は第9次の調査になります。

### 調査の概要

現在行なっている発掘調査は府立大学農場の跡地で、南の調査区の東半部は植樹で大半が攪乱を受けているため、全体の様子についてはよく把握できないのが実情です。残りは比較的后世の攪乱が少なく、多数の遺構を発見することが出来ました。

発見できた遺構には掘立柱建物・溝・柱穴・土壇・竪穴住居址等があります。以下、主なものを説明します。

### 発見した遺構

〔建物〕 掘立柱の建物で、柱穴を組み合わせると、南の地区では6棟分（建物1～6）、北の地区では7棟分（建物7～13）の建物が想定できます。何れの建物も柱穴からの出土遺物は少ないのですが、奈良時代の終わりから平安時代初めの土器が出土しています。

建物1は他の建物群と離れており、建物の構造もかなり歪んでいます。

建物4は総柱建物で倉庫と考えられます。6.3×5m(31.5㎡)で中程度の規模です。

建物4・5・6は柱の一部が重なっており、少なくとも2つの時期以上あったことが考えられます。ここでは比較的大きい規模の建物があるようですが、全体に歪んだプランを示しています。

北調査区の西半部では倉庫と考えられる建物（建物7～9）が集中して発見されています。規模は2×2間の建物で、小規模なものです。

建物11（2×4間）・12（2×5間）は一連の建物と考えられます。

建物13ではこの建物に接して「まじない」に関連する遺構を検出しているため、居住の目的で建てたことは確実です。

【溝】 ほぼ直線的な東西方向の溝や多少カーブする南北方向の溝を各1条、調査区の北西から南東にかけての方向を示す溝を1条発見しました。

溝1は幅0.8m前後、検出面からの深さ0.2mを測る。埋土から奈良時代と見られる土器の小片が出土しています。

溝2は幅1.4～1.5m、検出面からの深さ0.15m前後を測る。遺構の前後関係から溝1・3より新しいものです。南の調査区では中央部辺で消滅しています。

溝3は幅0.6～0.9m、検出面からの深さは南調査区では0.2～0.35mを測る。調査区の北西から南東にかけてS字状に流れる溝で、南の調査区でも発見していますが出土遺物がないため時期は不明です。南の調査区でもその延長を発見しています。

【竪穴住居址】 南の調査区で2棟、北の調査区では現在までに少なくとも7棟の竪穴住居址を発見しています。

竪穴住居址1は小型の隅丸方形の形状を示しており、出土遺物から奈良時代のものと考えられます。竪穴住居址2は長方形のもので古墳時代後期のものと考えられます。

北の調査区の竪穴住居址3～11では輪郭のみを発見しています。

【埋納遺構】 平安時代のほぼ全般に亘る埋納遺構を発見しました。南調査区では3基確認しています。うち埋納遺構1は土師器の皿を何十枚も組み合わせたものです。ほかに建物に関連する祭祀と考えているものもあります。それは、柱穴埋納で柱を立てる前に祭ったもの(2)や、柱を抜いた後で祭ったもの(3)などです。これらはこれから住む建物の安全を願ったり、これまで住んでいた建物に対する感謝の意味が込められていたかと思えます。いずれも土師器の皿が埋められています。

北の調査区でも5基発見されています。皿と小壺を組み合わせたものや皿を据えたものがあります。このうち埋納遺構5は建物13の東側柱筋の中央に据えてあり、この建物の鎮護を目的とすることが確実な資料です。ほかの埋納遺構は関連遺構が追及できないため、不明と言わざるを得ません。

【柵列(塀)】 3条分確認していますがどのような性格のものかについては、今後の検

討課題です。

〔土壌〕 多くの土壌を発見していますが、主なものを紹介しておきます。

土壌1は長軸5.3m、短軸2.7mの小判型のもので、古墳時代の遺物が出土しています。

土壌2は規模は不明ですが平安時代の遺物が多量に入っていました。

土壌3は径0.8m深さ0.5mで、平安時代の遺物が比較的多く、砥石も出土しました。

土壌4は長軸0.8m、短軸0.6mで、周囲は火を受けた痕跡が認められ、底部には炭が詰まっています。

### 出土した遺物

縄文時代から現代にかけての遺物が現在までにコンテナで約80箱出土しています。

遺物の大半は土器であり、他に金属器、石器、石製品、瓦、<sup>せん</sup>磚等があります。

〔土器〕 縄文土器、弥生土器の破片

古墳時代…土師器(甕、壺等)、須恵器(甕、壺、杯身、杯蓋、高杯、平瓶等)

奈良時代…土師器(甕、壺等)、須恵器(甕、杯、<sup>すずり</sup>硯等)

平安時代…土師器(皿、甕等)、須恵器(皿、甕、<sup>わん</sup>碗等)、緑釉陶器(碗?)、黒色土器(碗?)

中世…土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器

〔金属器〕 <sup>くぎ</sup>釘、<sup>せんか</sup>銭貨、<sup>てっさい</sup>鉄滓

〔石器・石製品〕 鏃(やじり)、石帯、砥石

〔その他〕 磚、瓦

### まとめ

今回の調査では、主な目的である竪穴住居址の他に、奈良時代から平安時代にかけての建物跡を植物園北遺跡で初めて発見したことは大きな成果であります。

また<sup>じちん</sup>地鎮、<sup>たくちん</sup>宅鎮と言った「まじない」に関連する遺構(埋納遺構)を発見しました。そして出土遺物から、それが平安時代全般に亘って行なわれていたことが判明しました。

しかし、ここでまた新たに問題点も発生するようになってきました。それは、調査地で

の遺構群はどのような性格のものであるかということです。

得られたデータは、下記のとおりです。

- ① 掘立柱建物群は奈良時代末から平安時代初めを中心としている。
- ② 建物の配置から見て律令制下の役所の構造を持っておらず、比較的身分の低い人たちの建物である。
- ③ 出土遺物も当調査地では首長クラスの存在を示すような遺物が認められない。
- ④ 地理的には上下カモ社のほぼ中間に位置しており、鴨御祖（下鴨）<sup>かものみおや</sup>神社にやや接近している。
- ⑤ 文献史料では天平勝宝2（750）年に御戸代田（神田）<sup>みとしろだ</sup>を、延暦4（785）年に封戸<sup>ふこ</sup>を充てた記録が見える。

以上のことから、調査地で発見された建物群は、カモ社の神田から貢納される物資を保管・管理していた場所ではないかと思われます。

X-105670

X-105680

X-105690

X-105700

X-105710

X-105720

X-105730

X-105740

X-105750



20m

10

0

Y-20980

Y-20990

Y-21000

Y-21010

Y-21020

Y-21030

Y-21040

Y-21050

遺構概略図



